

国立国会図書館 柳横楯 5編15巻 208-751

ガラス使用

夜三月柳の横櫛二編卷之下

東都

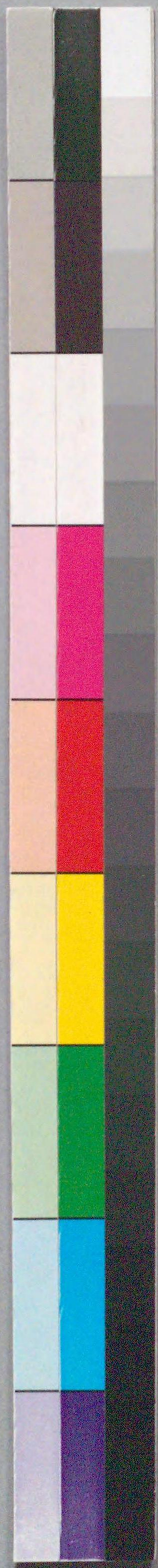
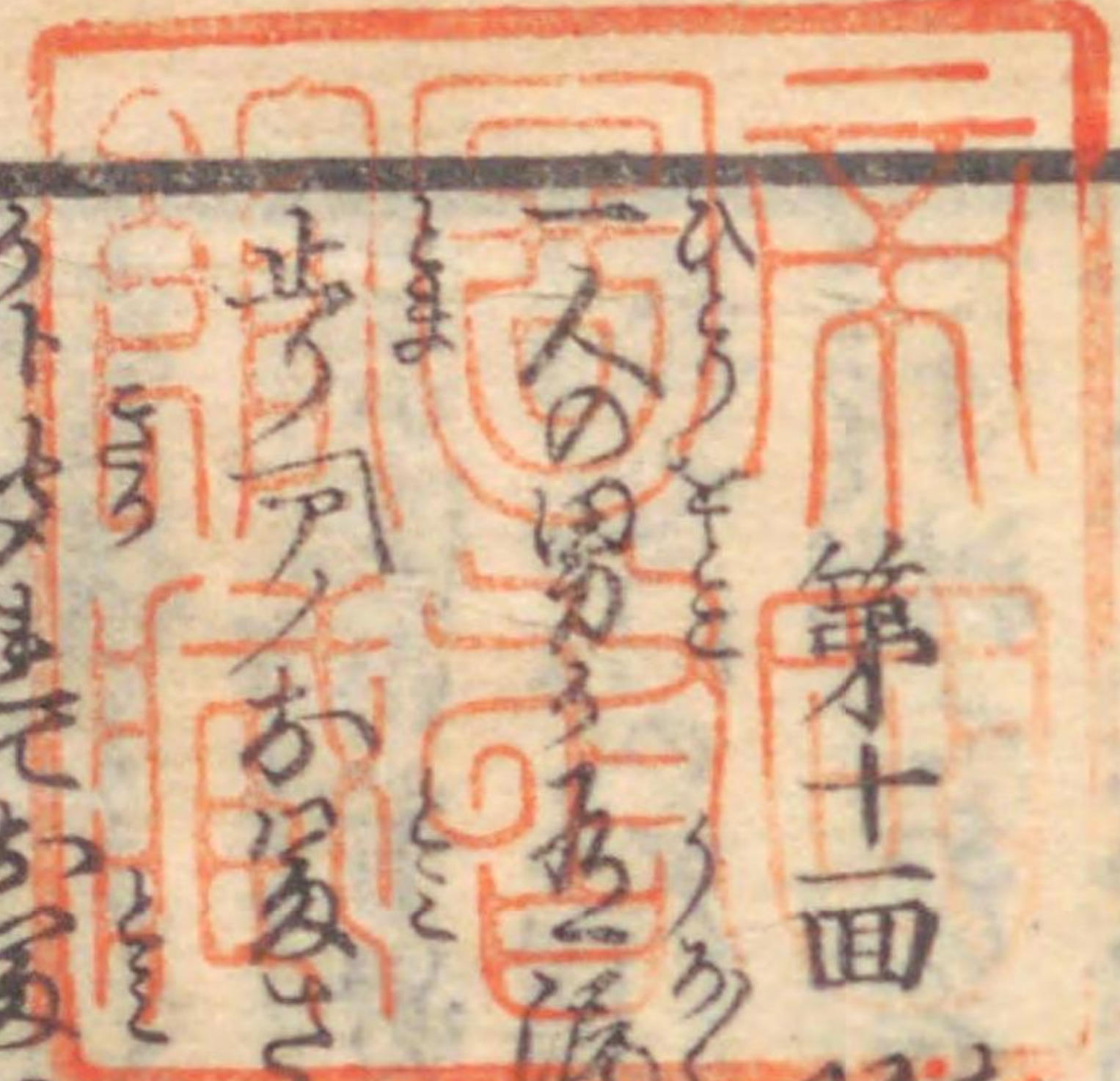
梅亭金鷲編次

第十面

羽風と死小落まをむらぐら

正 3. 25 7. 購求

一人の男が... 此の男が... 此の男が... 此の男が... 此の男が...





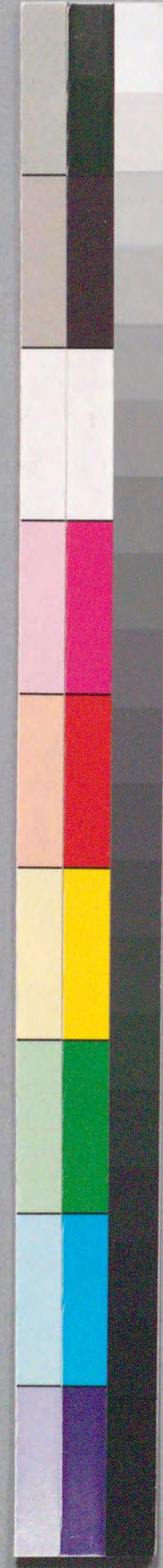
ぞ 年お出るすつて 下すしりふか云傳也 此度いまます
 ばてお家の「唯一とをうり 故中の 意をを為さまは 母れお
 未の傍より「か」とまう 海」とは 今上りしとさう せは 下
 といは 此苦勞さあて 此度いまます 男「おれは ちよと云
 於て 門の戸別 寄故りゆくお 米のお 家小おむりひ 可也 ちよア
 一寸 せは ちよいせを 一ハイ 大方お 酒さうが 困る 終へ 米 可也 ちよ
 何れ 申す 位なるの 仕方が ありの 子 家 可也 ちよ しくさく
 強らさると 誠は 存せし 申す ちよ なるが ちよ 揺る 一 終

撥あけ「お茶の 大辨 小かろて 指さす ちよ ちよ ちよ ちよ
 此蓋りの 小ありま ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 せて 来ます ちよ 我家の 故 不出と ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 ばあ ちよの せん ちよ 躊躇 ちよ ちよ 煩ふ ちよ 踏次 ちよ 不雅 児 負く
 ちよ ちよ ちよ 十三 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 の ちよ 下 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 代 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ



竊ひらとさてやけを子守こりの頻あつまふ承う知ちまる店た家かの守まり
 分あ負ひる子こと屯あへあままく側そへまり「坊たぢぢん負あぶあせ
 脊せ中ちゆうと出で以小せう縁えんて別べつ深しんへ指さるやらんお家いへが肩かた小せう長ちやう付つけ
 とそそのまへまく後ご生せいるる今いまそそるる小せう
 志してお呉くれヨよ「アあままう世よ過かててるる子こ「お湯ゆ小せう運うんりり
 々々わ房ふと屯あへあままくサさ子こ「史しぢぢやアあ史しままもも拵ぢんんててるる
 家いへ「何なん卒そつ方ほう拵ぢへへお呉くれヨよトと彼か推お見みを脊せ小せう肩かたてて心こ服ふく
 町まちのの下した隣りん入い江えの里さとの町まちととづづきき松まつ下した亭ていへへかかるる

使つかひひ小せう来らいるる男おとこが立たりりををけけ方かたへへお出いと飛と石いし修しゆひひ難なんしし
 ぎぎ「父ちち業わざ内うちとままるる小せう源げんをを弟あにのの一いち人にん酒しゆののをを拵ぢへへししが
 お家いへが児こと肩かた来きるる由よし苦くとと死し骸がい付つけるる「是こレレササ何なに
 店た家か拵ぢるる男おとこと脊せ肩かた来きるるここのの「アあ小せう子こ今いまお入い
 七しち四しよ拵ぢへへままりりとと来きららううとと存ぞん下した路ろ次じと拵ぢへへとと世よ子こ
 か松まつととつつてて肩かた来きるるお呉くれヨよとと多たくく送そう入いるるまませんせんとと何なに
 の用もちににままりりまませんせんが拵ぢへへくく連れんてて来きるるここのの七しち四しよ拵ぢへへままりり
 サさ坊たぢぢんんやや拵ぢへへお入い下した脊せ中ちゆうと下したへへ懐なつへへままりりとと



子頼腦こぞんねう不な困こらせるを仕し方かがわへ世延よの女少せう老らう也や頼ねん
 也やちりとせをせり酒の度後ご又またの神代しろ々々綾あや物もの様やう姿すがた
 的てきとまどもの禁制せい也や又また不ふ工こう体たいの月の子へ形と法也や
 いけもせん々々何なに年ねん老らうの例へ定んを異いなるはらよう也や
 子し多た何なに根ねもあるうねぞ志し々々大だい福ふくの人陸りく妻さい也や也や
 手て也やの子が出来き々々岷み可か也や不ふ可か也や々々何なに年ねん也や也や
 遠とほの慈母ぼアア一いっツつ破やぶる後ハハ不ふ疑ぎ也や何なに年ねん也や也や
 次つぎてそササ翻ひら是こもすよう也や一いっ時とき小こ家けの慈母ぼアアも此也や也や
 大だい多た福ふく也や何なにが収く入る来々々何なに也や也や也や也や也や也や
 トト何なにも受不ふ付つても何なに処ところ也や何なにが有るう引ひ懸かる也
 と思つて也や也や也や也や也や也や也や也や也や也や也や
 又また也やのサララトトお猪はらう述也やの多不ふ波な々々次つぎ也や也や
 各おのトト各おの各おの也や也や也や也や也や也や也や也や也や
 のののの也や也や也や也や也や也や也や也や也や也や也や
 一いっ也や也や也や也や也や也や也や也や也や也や也や
 皇こう酒しゆ也や翻ひら一いっ也や也や也や也や也や也や也や也や也や



5 6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8

出雲の神の比夫志う月下老人がえあうしあや自己
もまご獨身者や春なりんごうあおの慈母ア哀
まごりお哀を旅不きうううう月の高蒲るうう
又つまよふ家の妻にうるせ人と申戯をたう美正ふは是
と時の様うさの宜年とて心後後ちやアねうと
あひまうりうらり親の初うねん中何時の方ふ
余所化不可屯男が出来て居るうその程も分ら
後へと心付てん知も探さざるんが必葉の他といふ

常平目の大人一さのちね志さるもあやへう何の波
の取越苦勞も心うう愈う物と情望は意あ
入るめが親の絆し二人の中どうせ此末共白髪
蒲團ふるまつて秋の夜寒も霜の夜も露玉明
石の浦千鳥須磨あはれ木更津の溪の美砂
の盡しるは縁の異なりの味を思ふを思ふとて他人も酔
う酔を何程う志さうサさね小少さく旅て居
る世方へあてまう一ツ階なと子を探引付られか



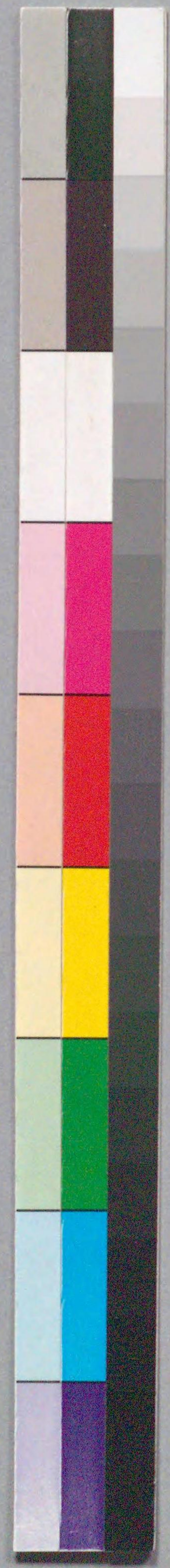


後小意用ごし仕作まゝに
 来たるア馬鹿をいふ
 裁き逃心お前の毒心
 何れも仕方ご入性
 慈母アお笑てん
 性せま可く
 下のお志んがり
 指し一人何や
 モシ慈母アさんへ
 ひ家何時の
 後小意用ごし仕作まゝに
 来たるア馬鹿をいふ
 裁き逃心お前の毒心
 何れも仕方ご入性
 慈母アお笑てん
 性せま可く
 下のお志んがり
 指し一人何や
 モシ慈母アさんへ
 ひ家何時の

お連ごらあ家の妙処をぞ立出る

第十面 埋むもまゝのや涙のあゆみ

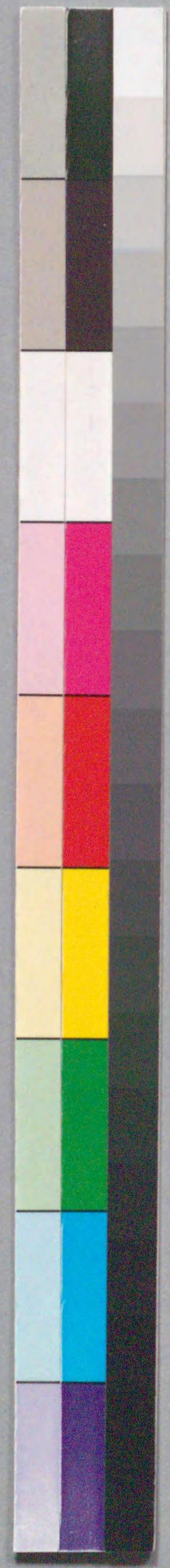
鐘の上野う湯草う耳元をく
 下のお志んがりとお家の
 指し一人何やと志んがり
 モシ慈母アさんへア
 ひ家何時の



5 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

此の世に小正の底をいざんと云はせし海方衆のせんを突
あつ者し思はれ小正の正位付の此方の乃末安
うきと針らひあふ世慈悲の海より深い大衆比
親あつ似ぬ子の鬼くく痛う母をををなり先ま
い不存存ゆ元いけ身の遠走うまうす由面あつた
あまごまの表由膝月の初子の目か妙通なるてと
積る嗽一由降る音と解く捲く下紐や人目の雲路
越す万由るくも君の長の四病をちうく又あつた四災

此世に彼根へ来て後の世續きざる災害トす
あつ世乃小愧ひ懐へて存るのラ人の嗽く虚言
と実とをされて夜も寐るのに辺を伸ゆてあの方残
あつ七八日を世ぬ縁う不きあ目小あつと木野界
色む小降る多しとや母子少不幸をか嗽くまうせ
愛らぬ優し丸心小差ありする情錢を枕小返して
ら甘んじ持出るるを金と世身を尋ねて夜更まを歩
りしるが元小あり親にさぬの心不真信あん身の熱在

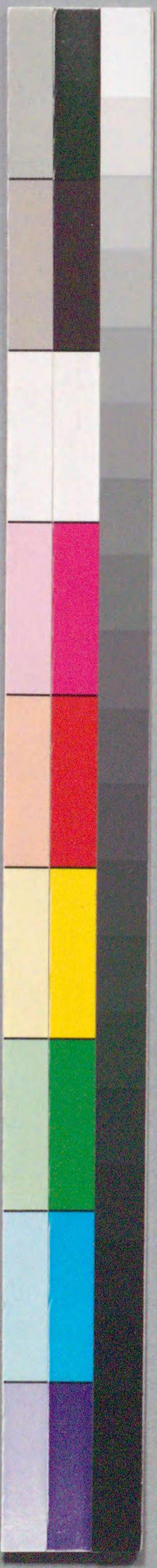


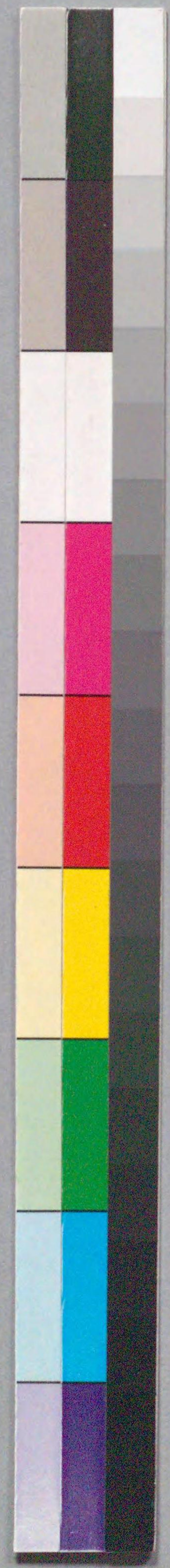
し一認め^{あは}ぬ^た一遺^たと^たと^た一^たより送^たり^た方^た彼^た紗^た色^たと
と^たつ^たあ^たへ^た一^た是^たの^たよ^たと^た一^た希^たよ^たと^たなり^たか^た志^た一^たの^た給^たり^たの^た委^たし^たく
と^たて^たの^たあ^たま^たが^た慈^た母^たア^たさん^たの^たか^た子^たの^た是^た一^た不^た由^た成^たう^たと
と^たひ^たも^たす^た成^たを^た修^たけ^た処^た不^た定^たす^たト^た云^た々^た常^たを^た操^た垂^た一^た身^た
持^たへ^たて^たま^たと^た徐^たと^た母^たの^た操^た教^たと^た是^たの^たぞ^た死^た一^た云^た物^た々^たの^たゆ^た
自^た由^たか^た肩^たを^た摩^たる^たゆ^たの^たも^たあ^たく^た一^た人^た任^たし^たく^た也^たを^たま^たせ^たう^たが^たの
上^た何^た卒^たか^た業^たを^た沃^たふ^たあ^たづ^たて^た早^たく^たか^たん^た身^たを^た丈^た丈^たお^たて^た子
系^た年^たも^たか^た遠^た者^た也^たか^た在^たら^た成^た下^たさ^たい^たま^た一^たモ^たウ^た私^たの^た事^た

ま^たす^たト^た堀^たま^たの^た涙^たを^たひ^たち^たり^た性^たん^たと^たて^たの^たま^た度^たり^たま^た度^た
ア^たて^たの^た性^たか^たり^た也^た現^たと^たま^たの^た操^た云^たも^た果^た一^た女^た乃^た不^たま^たの^た
刻^たを^た促^た一^た来^たる^た拍^た子^た本^た不^た是^たを^た後^たま^たと^たり^た未^た練^たあり^た初^た
間^たと^たり^たて^た母^たさ^たの^たか^た眼^たが^た学^たを^たあ^たけ^たし^たせん^たを^た修^たく^たと^た身^た持^た
心^た以^た修^ため^たて^た我^た家^たを^た立^た出^たす^た処^た又^た命^たの^た捨^たと^たり^た世^た処^た也^た
真^た途^たの^たを^た度^たと^たと^たど^たり^たの^たふ^たさ^たん^たと^たま^た死^たぬ^たと^た自^た己^たが^た修^た
る^たと^た性^たの^た度^たり^たの^たま^たと^たず^た由^た比^た敷^たの^た沙^た山^たの^た禁^た下^たる^た思^たふ
か^た是^たあ^たぞ^たぬ^たふ^たる^た○^た却^た鏡^たと^たと^た希^たの^た身^た不^た学^たと^たる^たあ^たれ^た教^たと^た

言梅へ母親か又へ密に夜はす一伍一什と立因て人
類す小歎息なり形跡なき憐れ云ゆ此身と除く産
まの子の身小法を継せたる母の心と知りるぞ虚しく
てあるるは行由寫らぬ隠謀より家の礼を引い
さんとの云の表向の親縁者の人々由れあは佳
引するもの由は親を此方と退たて何処か何なる果
ゆめゆめ跡と譲らんゆめと脱小覚悟の後とど人
月の関与多しとて於その情なき今白ハ若く松の

吐嗟紛息を僥倖小只一封の遺書して我家と母の
何処と處との由云はる日雪の里の極木や
の幼少時小育まれ乳母が家あてありけは彼処
へ往く今宵と心静小計らんと北日原の星
を小雲さ人出た時さ夜を胎のあさる身を継て心
に只一人歩めしゆ多く歩め来て比叡の二橋も子
まをたの思ふが困小誰かすは時か爰ゆ此処ありて身





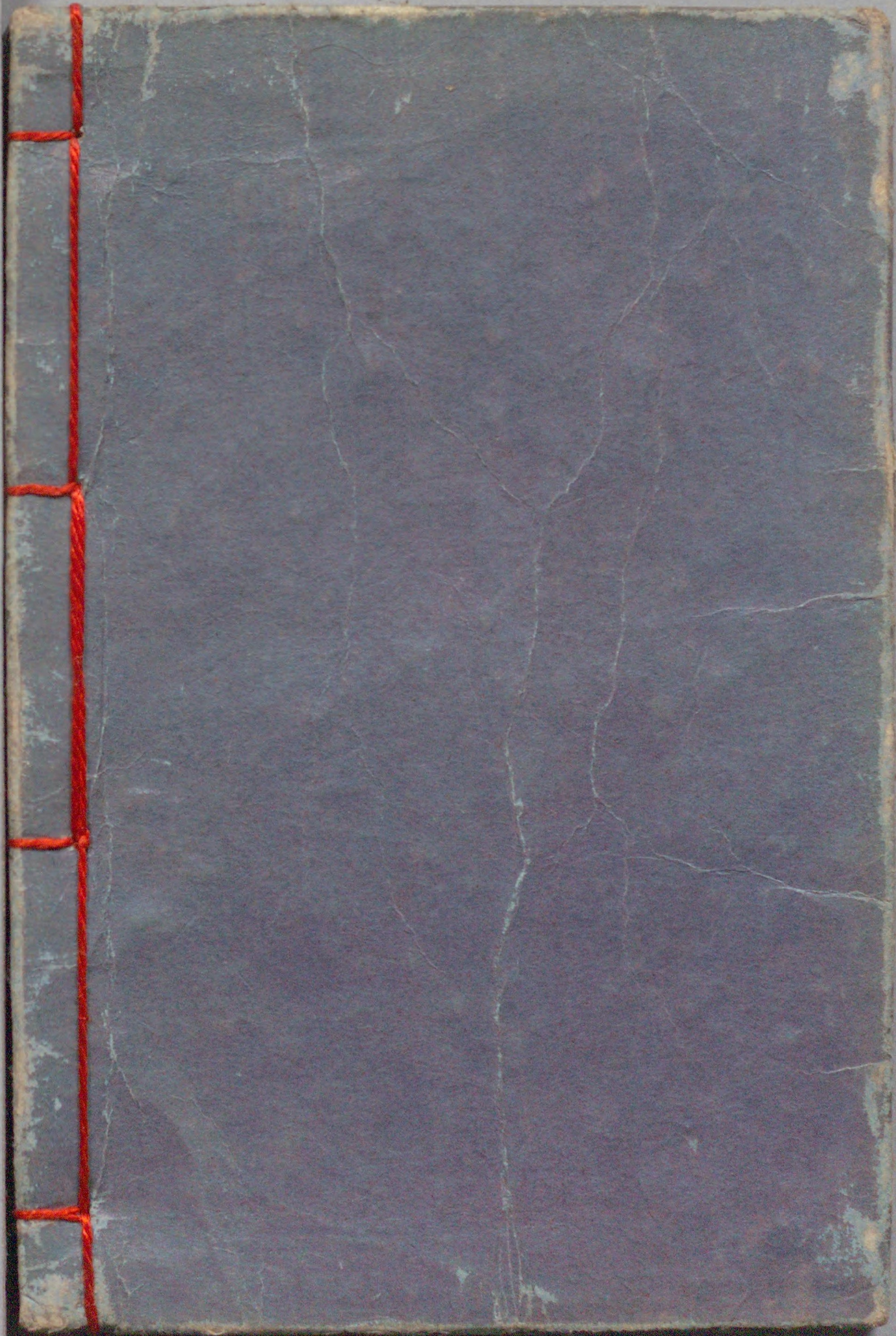
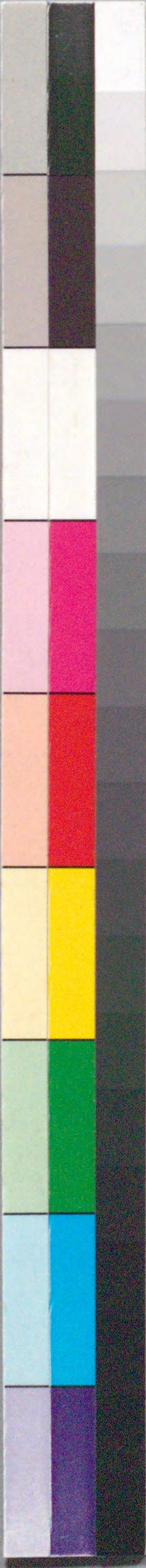
跡目と纏らうしとの名を以て其の早せうが子成程お
 金箱の金が六あるつゝの又か身持が以て放情ごみどりの
 りては後々の以て窮途由丈止ねる人側々して水
 さす者かあるある者困つことこの存トるごう様へ此
 御云まうし上てもお水の水のさうがさるるを遊中
 私一其のまうするのめ関入のあまの辨小將の安あ
 めが修との不届をり致して此存りまはまは中しり
 意の慮もあつて何根をうと報舎也業小業

七番より一が支社のりゆあるのを何所までも被振と
 かをまうして其の義のあ方のり作小云自狂とあるを
 乳毛の中ての丈とぞんド内日の是非と丈且那
 さあへまうし出さうと骨と格と格と格と格と格と格と
 然し裏はうか出さうに成り宿子ふに心持ぬ若吏
 と由の窮途の有りさうとあつて世の者や其の女中
 小使てゆく初めぬとさうり小使のしひを候小使後
 つうけ表へ出ても早の安のりえを七然るごう自若

208
15
751

栞の横櫛二編之下 終

の望に極木座のか乳を上と女の宿大方彼処へか
奈一か後を慕ひ糸つて由年寄の夜及て掛り
ねどい処を彼根へ遊付ますの今日とぬのか陰でか
ゆ存のまをうモレ若上形とる先篤りとかをとる
年寄めかまうす一存りかほるまをて下とるまと栞
る彼と程放とす美心面ふまうりまうり



国立国会図書館 柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用